



一経験論者，ジョン・ロックの言語観

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-11-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 葛西, 清蔵 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00001725

一経験論者，ジョン・ロックの言語観

葛 西 清 蔵

北海道教育大学函館分校英語学研究室

Seizo KASAI: Linguistic Viewpoint of John Locke, the Empiricist

内 容

- | | |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ◦ チョムスキーへの距離 ◦ 無変化詞について | <ul style="list-style-type: none"> ◦ 一般意味論的性格 ◦ 結 論 |
|--|---|

0. チョムスキーの文法理論を中心にして、今までの経験主義的な言語観の弱点が指摘され、デカルトの合理論が強力に取りあげられる様になって来た。本稿に於いては、少なくとも言語理論に関する限り、よく問題とされる様に、経験論対合理論という形で問うことが出来るものかどうか等、その他二点について、一経験論者ロックの場合についてその言語観にふれてみたい。

1. かつての文法理論では、少なくとも言語習得に関しては、経験論が前提とされており（パターン・プラクティスにもその例は見られよう）、文法、或は文法教育で扱うのは、もっぱら現実に発せられた言語そのものであったと言っていい。しかしこの様な研究態度では説明され得ない事項のあることが示され、ここで大きく方向をかえ、発話に至る心理的な過程が文法理論の中でも重要な位置を占めることになって来た。そしてこの心理的な過程は人間に共通にみられる生得的な能力にもとづくものであるとして、デカルトの合理論にその理論的な根拠を求めていたことはよく知るところである。当時の哲学者も又多くそうである様に、デカルトの著者の中でも言語にふれた個所は散見されるのであるが、その中でも最も重視されているのは「方法序説」(*Discours de la méthode*)の中の次の個所であると思われる。¹⁾即ち「いかほど愚鈍な人間にでも出来る程度に、目の前で出来る一切の意味に対して応答出来るだけの言葉をかれこれ按排する機械は考えられない」とまず機械と人間の差異について触れ、続けて「理性」はどんな種類の出来であってもこれに応用する「万能の道具」とみられ、「色々の言葉をあつめて按排し、これらをもって談話を構造し自分の思うことを解らせれぬほど鈍重で愚昧な人間は痴呆者を除外しないでも、一人も居ない」という。又「動物は……言語活動のなしうるものの皆無である」ことが極めて著しい事実であるというのである。この内容のこれとしての正当性は言うまでもないが、これこそチョムスキーがデカルトを取りあげ、人間の生得的な、共通にみられるものとしての言語能力をふまえ、経験論と対立的に自分の理論を展開する論拠となるのである。事実 *Cartesian Linguistics* に於いては上掲の個所をまずあげて合理論の正当さの説明を展開している。²⁾ 哲学的には、経験

論の欠点は、仮りにすべての認識が経験のみから来るものとすれば、経験の異なる人間の間に共通の意識は成り立たない筈である、という一事をもってしても（又これが合理論の重要な論拠ともなるのであろうが）十分に指摘され得る。いずれにしてもチョムスキーは、「言語習得について、経験論は論破出来るものであり……経験論的考察は空虚である……」³⁾と云い、カッツは「経験論的仮説では言語習得は説明出来ない」⁴⁾と云って経験論は不充分さを指摘するのである。然しながら後でも触れる様に、当のチョムスキーが、生来の生得的なものに加えて、非常にわずかな未知の部分を経験から来ることを示している様に、経験そのものを全面的に否定し去ってしまっているわけではないと言えるわけで、上にあげた様な言葉もあくまでその不充分さを述べた言葉として受けとる方がより正確であろう。

この様な立場があらわれると、又一方では、合理論、経験論の立場はそれとしてその依って立つところは認め、「言語の習得は人間に理性があるからこそ可能なのだが、どういう具体的な言語を習うかということは、その個人が後からおかれた社会環境によって後天的に定まる」のであって、言語習得については、「合理論」と「経験論」が仮りにあるとすれば、それはより高次の Synthese へと揚棄されなければならない」という素朴な折衷案でこの問題を提出しなおしている学者もいる。⁵⁾

合理論か、経験論かという問題はそれとして哲学的に既に認識論の中で扱われている問題であるが、言語理論に関してこういう形、つまり合理論か、経験論か、或は又両者を Synthese へと揚棄したものか、という問題の設定の仕方が果してどういう意味をもつものであろうか、一般的、抽象的な議論よりも、まず当の経験論者であるロックの考えるところから探り出してみたいと思う。

2. ロックの理論が、言語に関してよく展開されているのは *An Essay Concerning Human Understanding*（「人間知性論」、「人間悟性論」）、とくにその第三巻であろう。彼の理論は言うまでもなくフランスの合理論に対立するものとして打ち出されたのであって、既にデカルトの「方法序説」を引いてみた様に、合理論に於いては、認識は生得的な観念がありその合理性に基づく、人間共通のものであるからこそ人間としての、共通な認識が成りたつのである、とするのに対して、人間の心はもともと白紙 (tabula rasa) なのであって、そこに個々の経験から単純な観念が受けとめられ、それらが集って、一つのより複雑な観念、複合観念ができていくのだとする。そしてこの観念に対する記号、「words are sensible signs (観念の可観的記号)」⁶⁾が言語であると定義する。ソジュールは概念とそれに対する聴覚映像の組合せを言語とし、現在、記号の体系を言語と見るのも本質的には大して違うものではない。後に順を追って明らかになる様に、ロックの言語観の正当さは、まさに「観念の可観的記号」と言語を定義したところからはじまる。観念と対応する記号としての言語に関連して、フォルンデルはその哲学史⁷⁾の中で極めて適切に次の様にのべている。「我々の認識をなすこの単純表象……から恰かも字母から諸々の語節が出来上る如く悟性活動による助力によって、複雑な観念、或は複合観念が出来る。……複合表象は全く我々の悟性の抽象或は普遍化に他ならぬ」(傍点引用者)のである。即ち我々の個々の経験から得られた個々の観念は、恰かもアルファベットの各文字から、その組合せによって様々な語が出来るのと同様に、複雑な観念が構成されていくというのである。然るにロックにとってこれらの観念の記号が言語だったのであり、これが論拠となって合理的な言語観と対立するわけである。ところでこの過程の中で軽視してはならない極めて重要な点があることにふれてみたい。傍点をほどこした上掲の箇所からも既に推測出来ることであるが、単純な観念が集って複雑な観

念が出来上るといふとき、それは観念がただ雑然と集って複雑なものになるのではなく、フオールレンデルの言い方をかりれば「悟性の助力」による抽象化、普遍化によってはじめて高次の複合観念が出来ていくといふことである。ロック自身の言葉によると「the mind... has a power to abstract its ideas (心はその概念を抽象する能力をもつ)」⁸⁾ のであつて、この抽象力を通して、最終的に最も抽象的な観念に至るのである。「すべての認識が経験からはじまる」⁹⁾ とはカントの言葉であるが、(むろんそれがすべてといふことではないのだが) 我々の第一の認識の資料となるものは個々の知覚によって得られたものであり、これが基礎になつて一定の認識が成り立つのである。このことは心理学的にも、又近くはサイバネティクスなど脳との関連において人間の認識能力が追求されるに従つてますますその正当性が明らかになりつつあるといふことができる。¹⁰⁾ 然し知覚が個人的な欲求に影響されることがあることは心理学の教えるところである。先にもふれた様に言語は恣意的な記号の体系である、というのが今の言語の一般的な定義であらうが、ここで言う記号とは固有名詞的に一対一に対応するものばかりではないのであつて、より正確には個々の具体的な指示物から抽象された観念、或は概念に対応するものである。この抽象する能力は、それによって概念を構成するといふ意味で概念構成の力、概念化の力とよんでもいいものであろう。「By this way of abstraction they are made capable of representing more individuals than one (こうした抽象という仕方では、観念は一つ以上の個物を代表出来るようにされる)」¹¹⁾ のであり「およそ言葉は一般観念の記号とされることによつて一般となるのである」¹²⁾ というロック自身の言葉からも彼の考えるところは明瞭である。この抽象能力、概念構成能力がいかに言語にとつて重要なものであるか更に説明を要し、この能力こそ人間を他の動物から区別し、人間の言葉を他の動物のものからはっきり区別して特徴づけているものであることも推測に難くあるまい。この能力によつて人間の言語習得が可能になるのに他ならない。(病的にこの能力を欠くものが典型的な失語症の一つであり) この能力こそ人間に共通で生得なものである。ここまで述べて来ると既にロック自身の言葉の中からも、言語に関する限り極めてデカルトに近いものをも感じることが出来るであらう。この事については、哲学者の中にも類似した意見をもつ者もいるのであつて、例えば、ヴィンデルバントは、我々の知識については全く同一の経験を意味するものも稀であるし、又逆に一切の経験もなしに基礎づけられる普遍性もないとし、「経験論は絶対的に先天的なものを否定しながらも相対的に先天的なものを認めないわけではない」¹³⁾ (傍点引用者) という言葉で両論には相対的な一面があることを指摘している。

合理論か経験論かといふ問題は先にも触れたように、哲学の上で既に扱われて来たものであつて、例えば、「我々のあらゆる認識は経験と共に起始する (anheben) といつても必ずしもあらゆる認識がすべて経験から発現するわけではない」¹⁴⁾ という言葉なども先のヴィンデルバントとは又別の意味で両論の間に位置する一つの見方を示すものとして受けとることが出来る。いずれにしても経験論、合理論はロックの言葉から推しても明らかだつたように少なくともある点については対立的ではなく、根拠を一つにするところもあるといふのであつて、問題はむしろ視点の違いといふやう。高橋はその「認識論」の中で、「経験論においては合理論におけるよりも起源の問題が一層重視されている……むしろそれが最も重要な問題となっている。……対象認識の本性的見方に於いては一致している」¹⁵⁾ (傍点引用者) と一般論をのべているがこれなども、特にロックにも見出される側面を示したものといふやう。

然し結論的に最も重要なことは、ロック自身の言うところからも明らかに導き出される様に、彼の理論の中で基本的に重要な役割を任されているのは実は白紙としての心なのではなくて、そ

の働き、心の作用、機能面であるということ、又個々の経験から知覚を通して観念をつくり出す抽象能力なのである。「経験は能力を練磨するもの、すべきものではあってもいわば内なる「基」であり、「素」である能力はそれこそ習慣の以前にある他はない。……この働きの基礎が勝義における心の能力即ち「理性」にほかならない」⁶⁾ というのがおそらくロックの言葉から導かれる限りの最も妥当な評価と言えよう。合理論の生得的な観念に対するものとしての経験論の基礎には広義の「理性」とも言えるものが既に前提されている、とも言えるのであろう。

少なくともロックに関する限り、その言語観からしては、単純に経験論か、合理論、或は又それらを総合的に揚棄するとかいう簡単な問題の設定の仕方がいかにふさわしいものでないかが明らかであろう。「この様にして言語を習う子供は、むしろ“習った”ことよりもはるかに多くのことを知っている」⁷⁾ とか「何かしかりした構造を生まれたときから知っていて、その上で非常にわずかな未知の部分を経験からきめていけば、それで言語の構造がわかると考えざるを得ない」⁸⁾ というチョムスキーと、(意識的にしろ、無意識的にしろ)結果的には経験を重視する底に生得的、普遍的な「理性」的なものが前提とされているロックの言語観との間にどんな本質的な距離があると言うのであろうか。経験論を極めて概念化して一般的にとらえ、単なる条件反射の集積ほどに考えるならともかく、少なくとも、ロックの場合については、チョムスキーの距離はデカルトと同じほどに近い一面をもつということが出来る。(なお後にも明らかになる様に両者の関心の違いは認めなくてははいけない。)

3. さて次に一つの具体的な例をとりあげたい。ロックは「人間知性論」を四巻に分け、その第三巻を「Of words (言葉について)」と題している。フォルレンデルは先に引用した「複合表象は全く我々の悟性の抽象或は普遍化に他ならぬ」に続けて「即ち意志伝達や精神的交通ならしめる事の悟性の方策に他ならぬ。ロックが彼の主著の第三巻をそれに献げたる言語の研究の重要さはここに基くのである」⁹⁾と言語を扱った第三巻の意味を明らかにしている。ロックはこの巻を更に十一章に分け、第七章を「Of particles (無変化詞)」にあてている。ロックの考えによると無変化詞とは「Besides words which are names of ideas in the mind, there are a great many others that are made use of to signify the connexions that the mind gives to ideas, or to propositions, one with another. (心のなかの観念のなまえである言葉の他に、心が観念もしくは命題を相互に結合することを表意するために使われる言葉」²⁰⁾である。無変化詞という言葉そのものばかりでなく、ロック自身「to speak the language of grammarians (文法学者の言語で言う)」²¹⁾などという言い方をしているところからもロックが当時の文法書を読んでいたことは明白である。当時出ていて彼が読んだと思われる文法書について調べてみると品詞の分類に関しては次の様になっている。即ち

P. Gr: *Grammatica Anglica* (1594)

変化詞 (有数詞) : 名詞, 代名詞, 動詞

不変化詞 : 副詞, 接続詞, 前置詞, 間投詞

Alexander Hume: *Of the Orthographie and Congruitie of the Britain Tongue* (1617)

変化詞 (有人称詞) : 名詞, 代名詞, 動詞

不変化詞 (非人称詞) : 副詞, 前置詞, 接続詞, 間投詞

Alexander Gill: *Logonomia Anglia* (1621)

変化詞 : 名詞, 代名詞, 動詞

不変化詞 : 冠詞, 副詞, 接続詞, 間投詞

Charles Butler: *English Grammar* (1634)

変化詞：名詞，代名詞，動詞

不変化詞：副詞，前置詞，接続詞，間投詞

Ben Jonson: *English Grammar* (1640)

変化詞：名詞，代名詞，動詞

不変化詞：副詞，前置詞，接続詞，間投詞²²⁾

がそうである。その分類の類似していることに驚かされるが、これはトラックス (Thrax)、プリスキアヌス (Priscianus) を中心にする分類法が中世を通じて伝統的にうけつがれて来たものである。何れにしてもロックが無変化詞と言うとき、具体的には大体上のような品詞を指していたと考えて誤りではないであろう。上述の言葉に更に続けてロックは「they are all marks of some action or imitation of the mind「それら(無変化詞)はすべて心のある動きあるいは、ほのめかしの印である)」²³⁾と言っている。即ち彼にとって無変化詞とは先にもふれた様に「命題を相互に結合することを表意する」役割をもつ、関係をさす言葉だったわけであり、観念をつなぐ働きをする、「心の動き」を表わすものだったのである。この言葉は極めて明瞭に日本の古い国語学者、鈴木胤(1764~1837)の言葉を想いおこさせる。時枝誠記によると鈴木は語は大きく、「詞」と「て、に、を、は」に二分し、更に「詞」を「体の詞」、「作用の詞」、「形状の詞」に分けたという。そしてその「詞」と「て、に、を、は」の性質の違いを対照的に次の様に示している。即ち三種の「詞」が「さす所ある」に対して、「て、に、を、は」には「さす所なし」であり、「詞」は「玉の如くである」に対して、その玉をつなぐ働きをするのが「て、に、を、は」であり、「詞」は「て、に、を、は」なしでは働かぬ」のに対して、「て、に、を、は」は「詞なしではつく所なく」、「詞」は「物事をさし顯して詞となる」に対して、「て、に、を、は」はその「詞」につける心の声」であると言うのである。ロックは無変化詞を、心が……命題を結合することを表わし、心の動きを表わすもの、であると言うに対して、鈴木は、「て、に、を、は」を詞を玉として、それをつなぐ緒の如きものである、とか心の声だとしていることがその類似を示す。無論、形式的、表面的な比較は軽卒にすべきではないが、時枝は鈴木を考え方を発展させて、詞と辞の二分をし次の様にのべている。

辞には助詞、助動詞、感動詞、接続詞などがあてられ、詞には名詞、代名詞、動詞、形容詞、形容動詞があてられている。又辞については鈴木が「て、に、を、は」に対してあげたのと同様の性質をあげている。時枝によるとこの様な性質を基準にした語の二分は日本語に限るものではなくすべての言語に共通なものだと言うのである。つまり、「語に次元を異にした詞と辞の存することは、日本語特有の現象ではなく、凡そ言語といわれるものには通有の事実と考えられる」ものであり、「ヨーロッパ語に於いても前置詞、接続詞の如きはそれ自身辞と考えることが出来る品詞である」²⁵⁾とのべてところからも知れる。この様な分類は他の文法家によってもいろいろなかたちで裏付けられているものである。例えば、J. ライオンズ²⁶⁾は、用語の固有の意味をもつものを major な品詞として、名詞、動詞、形容詞を含め、それ自身では意味を有せず、他の品詞につくことによって意味をなすものを minor な品詞として、前置詞、接続詞等を含めている。又正確さを期すため従来の文法とは違った方法で分類したフリーズ²⁷⁾のものも結果的には類語としてちょうど従来の名詞、形容詞、動詞、副詞の一部、それ以外のものが機能語として分類されている。O. トマス²⁸⁾はフリーズの類語をレンガ、それ以外のものをモルタルに喩えている。個々の命題を結合することを表意する言葉、玉に対する緒、レンガに対するモルタル等その表現に

見る共通点が興味を引く。ロックの無変化詞に対するこの様な洞察力に富んだ見方は、1. でも触れた様な論拠から発するものであって、それに沿って理解されるべきものである。即ちロックは単純観念が集ったものから、抽象力によって一般化が行なわれ、一層抽象的な複雑な観念が出来上るものとしたが、その抽象化、概念化の過程に段階がある筈なのである。おなじ様に最初から関係を表わす非常に抽象の度合の高いものから比較的抽象性の少ないもの、つまり具体性の高いものまで存在するのである。この前者に属するものが多く、命題の結合を表わすものとしてのロックの無変化詞の一般的な性質であったと解すべきである。むろん程度問題で変化詞と無変化詞を単純に明確に二分出来るものではないのであって、中間的なもの、両方にまたがるものもあるのであり、これは時枝の場合も同様であって、最近では「連続説」²⁹⁾としてその連続した性質を指摘される様になった。

対象とする言語が違い、時代的背景が違い、接触のない別々のアプローチの中でこの様な本質的な点を一哲学者ロックが見て取っていたということは一つの驚きというより他はない。

4. 最後に、ロックの言語観について触れたい第三の点は、今で言う一般意味論の性格である。ロックは「言葉について」と題した第三巻の最後の三章を夫々、第九章「Of the Imperfection of Words (言葉の不完全について)」、第十章「Of the Abuse of Words (言葉の誤用について)」、第十一章「Of the Remedies of the foregoing Imperfection and Abuses (前途の不完全とその救済法について)」ともっぱら言語の実用的な面の問題にあてている。

仮りに一般意味論(これはいわゆる哲学的或は心理的意味論等に比して、元来極めて実用的な色彩の強いものだと思うのだが)の目指すところをハヤカワ³⁰⁾に従ってまとめてみるとすれば次のようになるであろう。

1) A map is NOT the territory it stands for (地図はそれが代表する現地ではない)。言語は指示物そのものではないということ。言語はあくまでその指示するものに対する恣意的な記号なのであって、記号即ち指示物であると考えてはいけないことである。

2) The meanings of words are NOT in the words; they are in US. (言葉の意味は言葉の中にあるのではない。意味はわれわれ自身の中にある)ということ。記号に意味を与えるのは人間の方なのであって、その意味は個人個人で違うものであると考えてもよい。意味は個人の言語生活を通じて習得されていくものであり、当然そこには生活背景の違いから来る個人差が生じ得る。この様な点からも意味は個人の中にあると言える。

3) Beware of definitions, which are words about words. (定義に気をつけよ、それは言葉についての言葉である)。できるだけ言葉についての言葉という抽象化された段階で考えずに、実例で考えよ、ということ。ある意味では一般意味論研究の目的はここに集約出来ると言えるであろう。言葉を正確に使えということであり、2)とも関連するが、言葉は多く各人各様に使われているから、そこから実際の発話の中でどんな誤解が生じないとも限らない。そこで言葉の上だけの抽象的な議論よりも言葉としての記号に対応する実際の指示物に基いてやれば効果的な議論が出来ようというものである。

4) Use *index numbers* and dates as reminders that *no word ever has exactly the same meaning twice*. (どの様な話も二度と同じ意味をもたないということを思い出させるものとして見出し番号や日付を使え)。これはむしろ上記の目的を達するための具体的な方法の一つと考えるべきで、意味の正確さを期すために、その当の語がいつどういう意味に使われたかを示すべく、見出し番号や日付を付けようということである。むろんこれは、当の意味が客観的にとらえ得る

性質のものでない限り大した意味をもつものでないことは容易に想像出来る。結局その四点にしぼってみて言えることは意味の本質の追求よりはむしろ言葉としての記号とその表わす指示物とのずれに関するものと見て間違いではない。

これらの点をふまえながらロックの上掲の三章を読むとき、その一般意味論的な性格をもつことに驚かされるが、以下具体的な例をあげて比較してみたい。

まず「言葉の誤用について」と題する章のなかに様々な言葉の誤用について触れているが、その一つに、「the using of words without clear and distinct ideas, or, which is worse, signs without anything signified (明晰判明な観念なしに言葉を用い、あるいはなお悪いことだが、なにも表意するものなしに記号を用いること)¹⁾」をあげている。これは言わば、1) の、地図はあるが曖昧か、或はすっかりずれてしまっている様な場合と考えられよう。記号としての言葉がその対応する指示物をはっきり指示していないために起る誤用である。「誤用」に次ぐ、「前途の不完全とその救済法」と題する第十一章の中で、この様な誤用に対しては、「a man shall take care to use no word without a signification, no name without an idea which he makes it stand (名まえをそれで表わそうとする観念なしに用いないようにすべきである)²⁾」とか又別の個所では「they must also take care to apply their words as near as may be to such ideas as common use has annexed them to (言葉に結びつけられている観念にできるだけぴったり言葉をあてはめる様にも人々は心がけねばならぬ)³⁾」と観念と記号のずれから起る誤用に対する極めて具体的な対策をのべている。

次に、上記の誤用の他に、「It is hard to find a discourse written on any subject, especially of controversy, wherein one shall not observe, if he read with attention, the same words (and those commonly the most material in the discourse, and upon which the argument turns) used sometimes for one collection of single ideas, and sometimes for another (論争について書かれた論文で、注意深く読むと同じ言葉が、ある場合は単純観念のある集りに使われ、ある場合は他の集りに使われるということの観察されないような論文を見出すことは困難である)⁴⁾」と言葉の「使用の一定しない」ことをあげている。これは上記のものとも関連する、ある意味では地図と現地のずれであるが、これこそまさにハヤカワの言う「いかなる語も正確には二度と同じ意味をもたない」と言うところとその意味するところは全く同一である。

又同章の中で、誤用の一つに「taking words for things (言葉を事物と間違えること)⁵⁾」をあげている。ロックにとって言語は観念に対する記号であることは最も本質的なことで、いく度かふれて来たが、今度の誤用は両者のずれではなく、両者即ち記号と指示物の混同を警告したものである。これは幼児、未開人の間ではよく観察される事実であり、言葉には常にそれに対する実体がある(こういう意味では実在論)としそれと同一と考えるものである。「名前と事物を同一視することが問題⁶⁾」となるいわゆる未開人によく見られるタブーは多くこの混同にその基礎があることは人のよく知るところである。観念と記号のずれと同様、記号と実体との混同というのは言語をもつものが無意識のうちにおかし易いあやまちであり、思考力をもつ人間を良い意味でも悪い意味でも特徴づけるものであると言える。ハヤカワの言う「地図は現地ではないのであり、言葉は物ではない」という個所は表現の仕方までそのまゝである。

「言葉について」の終りの三章は既に述べて来た様にもっぱら実用的な面にあてられており、その扱っているところは概して言葉の肉離れ現象と言われる“ずれ”であるが、最後にもう一つ関連した例をあげたい。同じく「誤用」の中で、「men having by a long and familiar use

annexed to them certain ideas (人々は長く使いなれると、言葉に一定の観念を結びつけてしまう)」ことがあるのであって「they are apt to imagine so near and necessary a connexion between the names and the signification they use them in, that they forwardly suppose one cannot but understand what their meaning is; (そのために人々はともすると名まえとその名まえの使われる意味表示との間にきわめて緊密で必然的な結合を想像するので、だれでも名まえの意味するところを理解しないわけにはいかないと早まって想定するのである)』³⁷⁾ と言う。この意味するところは既に明白なように、意味の曖昧な言葉もいく度かきくうちに理由もなく理解出来た様な錯覚をもつことがあることの指摘である。これは我々が日常的に経験するところであり、話し合が抽象的になってしまう大きな原因でもあるが、通信手段が極度に発達し、すべての情報が大衆的な方法で一方的に伝達され、言語の裏に意図されているものを確かめることの出来ない現代では、今まで掲げて来たどの誤りにもましておかし易い誤りであると言わなければならない。

おなじイギリスの経験論者ベーコンは我々の真の認識をさまたげるものとして四つの偶像をあげ、その一つを‘市場の偶像’と名づけた。これこそ記号としての言語とそれに対応する指示物とのずれを問題としたものである。即ち、我々は言葉が単なる記号であることをわすれて、言葉には常にそれに対応する実体があると考えやすいが、この様なことが我々の認識をくもらしてしまふと考えたのである。この意図するところはまさにロックに相通するものである。

一般にこの様なことは哲学者の共通の関心であったらしく、ロックに先だつおなじイギリスの経験論者、ホブスは『リバイアサン』³⁸⁾の中で、「ことばの悪用」という項をもうけて、その例を四つほどあげてこの点に触れているが、そこでも類似したものを発見することが出来る。例えば、その一つに「人々がかれらの語のいみが不定であることによりかれらの思考とまちがって記録するばあいであって、そのためにかれらはかつて心にいだいたこともないものを概念として記録し、こうしてかれら自身をあざむくのである」と言い、又その二つには、「かれらが語を比喻的に、すなわちその語が定められている以外のいみにもちいるばあいがあって、これによつて他人をあざむく』³⁹⁾ と言うあたりは同類の関心の深さを示してあまりある。

哲学者は言語に対して非常な関心をもつのが常であって、その著書の中にも、又言語学の歴史の中にも言語に関連したことが発見出来ることが多いが、彼らがそうするのも当然であろう。何故なら「No matter what a view a philosopher takes of the nature and scope of philosophy, his explanations and public elaborations of it is dependent on his use of language. (哲学者が哲学の本質とその領域をいかに考えようとも、哲学者は、言語を使用してのみ、哲学の説明もでき、人々に哲学の詳述もできるのである)」⁴⁰⁾ からである。ある意味では正確な言葉による定義こそがその目的であるとも言えるであろう。カルナップは哲学の問題は言語の問題であると感じていたと言われている。⁴¹⁾ 彼らは言語に関心を持たざるを得なかった。このことに関して特に興味を引くのは、哲学的な根拠を異にするとされているデカルトがその『哲学原理』⁴²⁾の中で言うところによれば、我々が言語を使用するとき、我々の表現しようとする概念を常にこれを表記する言葉と結合してでなければ覚えていないために、後になると伝えようとする当の概念より言葉の方をより容易に想い出してしまふ。それ故、「その概念をば言葉の〔示す〕あらゆる概念内容から分離するほど判明な概念をもつことは殆んどない」のであり、「思惟は事物よりもむしろ言葉を相手にする」のだと言う。だから、しばしば「かつて理解したと思ひ込み、或は正しく理解した他の人から聞いたということで、実は理解されていない言葉に同意を与える」という

言葉も、既にあげたロックの「人々は長く使いなれると、言葉に一定の観念を結びつけて」しまい、「だれでも名まえの意味するところを理解しないわけにはいかないと早まって想定してしまう」と言うのとは表現の仕方にすぎないと言えよう。

最後に、同様に言葉の正確な使い方を表わす言葉としてショウペンハウエルの「かすり傷でも断じて許さるべきではない。表現を明確、正確にする力、手段こそ、一つの言語に価値を与えるからである」⁴³⁾と言っているとあけておいてよからう。

論拠に異なる立場をとりながら言葉の性質について同一の見方をしていたということは、1.でも触れた様に、合理論か経験論かという問題についてロックの経験論の一面を表わすものとして、又言語に関して合理論か経験論かと(少なくともロックについて)単純に問うことがいかに危険であるかを一層明確に示すものであると受けとれよう。

5. 以上三点に限って、同じ経験論のホッブス、対立する合理論のデカルトの具体的な言葉の比較によってロックの言語観の一面をのぞいてみた。その全体を通じての言葉に対する洞察力にとんだ、正確な把握の仕方を認めないわけにはいかない。英文法においては、中世を通じて来たラテン文法を抜け出し、言語をよく書き、よく話すための「べし」としての術ではなく、言語事実をありのまま見ようとするいわゆる科学文法がスウィート(1845~1912)、イエスベルセン(1860~1943)等によってうち出されたのはそう古いことではない。然るにロック(1632~1704)は言語を観念に対する記号と見、両者のずれに注目しその対策まで考えていたのであった。全体が経験論の立場にたつ認識論を基礎にしているわけであって、その色彩が強いのは当然である(これに対して興水はその『言語哲学』の中で「それは、言語の問題が人間悟性の領域に移されたことのみならず、さらに、それがいわゆる認識論的に吟味せられる機会を作ったものとして、斯学の上に重大な意味がある」⁴⁴⁾と高く評価している。)がそれだけに言語プロパーの研究では達し得なかった点を既に見取っていたと言える。無変化詞についてはあまりに概念的、一般的にすぎるがそれ以上は望みすぎというものであろう。なおつけ加えるべきはロックが言語を扱った個所の題は Of words であって、Of language ではないことである。

結局ロックの言語観の特徴は、それを観念に対する記号と定義し、そこから両者のずれの原因を探り、その対策を考えたり、哲学的ではあるがあくまで人間の伝達的手段としてその正確さを求めるという目的を失わなかったことにあると言える。これは「誤用」等を扱った部分にも明瞭にあらわれている。「Were the imperfections of language, as the instrument of knowledge, more thoroughly weighed, a great many of the controversies that make such a noise in the world, would of themselves cease; and the way to knowledge, and perhaps peace too, lie a great deal sooner than it does (かりにもし知識の道具としての言葉の不充分さがもっと徹底的に考量されたら、あれほど世を騒がせた論争の多くはひとりでなくなり、知識への道は、そして平和への道は、今よりずっと開けるであろう)」⁴⁵⁾という言葉はそれが書かれた1697から270年ほど経た今日、何ら古さを感じさせないばかりか、今のような時代にはむしろ一層新鮮さをもって来るとさえ言えるであろう。

然し、上述のように深く言語を洞察したロックが言語の起源については、「ことばのさいしよの作者は神自身であって……」⁴⁶⁾と言うホッブスと同様に、「God, having designed men for a sociable creature... furnished him also with language, which was to be the greatest instrument and common tie of society. (神は人間を社交的の被造物であるように……共通の紐であるべき言語を人間に備えたもうた)」⁴⁷⁾と共に言語の起源を神に帰しているのは、「神を信じ

るのは心情であって理性ではない」⁴⁸⁾ と言うように個人の宗教的、又は時代的背景によるのであろう。

- 註 1) 『方法序説』落合訳(岩波, S. 33) pp. 69, 70
 2) (Harper & Row, 1966) p. 4
 3) *Aspects of the Theory of Syntax* (M. I. T. 1967) p. 54. cf. 51, 53
 4) *The Philosophy of Language* (Harper & Row, 1966) p. 255
 5) 『言語』「言語の構造と機能」服部(東大出版会, 1967) p. 20
 cf. 岩波講座『哲学』11, 「意味」(岩波, S. 43) p. 289
 6) *An Essay Concerning Human Understanding*. Vol. 2. (Dover publication INC.) p. 8
 7) 『西洋哲学史Ⅱ』栗田他訳(岩波, S. 25) pp. 234, 235
 8) *An Essay*. (op. cit.) p. 101
 9) 『純粹理性批判(上)』天野訳(岩波, S. 18) p. 55
 10) 『生物と情報』桑原(日本放送出版協会, S. 43) pp. 72, 73
 『現代の心理学』今田(岩波, 1965) pp. 235, 236
 『新哲学入門』山崎他(講談社, S. 43) pp. 61, 62
 11) *An Essay*. (op. cit.) p. 17
 12) *ibid.* p. 17
 13) 『哲学概論』第一部(岩波, S. 32) p. 231
 14) 『純粹理性批判』(op. cit.) p. 55
 15) (岩波, S. 23) pp. 58, 59
 16) 『哲学大系』2. (人文書院, S. 43) p. 250
 17) *Aspects*. (op. cit.) p. 33
 18) 朝日ジャーナル, 1966, 9, 25日号
 19) 『西洋哲学史Ⅱ』(op. cit.) p. 235
 20) *An Essay*. (op. cit.) p. 98
 21) *ibid.* p. 102
 22) 『英文法史』渡辺(研究社, S. 40) pp. 184-317
 23) *An Essay*. (op. cit.) p. 99
 24) 『国語学原論』(岩波, S. 41) pp. 232, 234
 25) 『日本文法・口語』(岩波, 1967) pp. 65, 66
 26) *Introduction to Theoretical Linguistics* (Cambridge, 1968) p. 273
 27) *The Structure of English* (Longmans)
 28) *Transformational Grammar and the Teacher of English* (Holt, 1965) p. 53
 29) 『講座日本語の文法』2. (明治書院, S. 62) pp. 84, 85
 30) *Language in Thought and Action* S. I. Hayakawa (Harcourt, 1964) pp. 314-315
 31) *An Essay*. (op. cit.) p. 122
 32) *ibid.* p. 152
 33) *ibid.* p. 154
 34) *ibid.* p. 125
 35) *ibid.* p. 132
 36) 『意味論』ピエール・ギロー, 佐藤訳(白水社, 1967) p. 70
 37) *An Essay*. (op. cit.) p. 141
 38) 水田訳(岩波, S. 42) pp. 67-69
 39) *ibid.*
 40) *General Linguistics. An Introductory Survey*. R. H. Robins. (Longmans, 1965) p. 358
 41) *Structural Linguistics and Human Communication*. B. Malmberg. (Springer, 1967) p. 2
 42) 『哲学原理』桂訳(岩波, S. 42) pp. 67-69
 43) 『読書について』斎藤訳(岩波, S. 44) p. 61
 44) 新版『言語哲学』(明治図書, 1966) p. 62
 45) *An Essay*. (op. cit.) pp. 119, 120
 46) 『リヴァイアサン』(op. cit.) p. 66
 47) *An Essay*. (op. cit.) p. 3
 48) 『パシンセ』上, パスカル, 津田訳(新潮社, S. 31) p. 184
 × × ×

- *The Use and Misuse of Language*. ed. Hayakawa. (Fawcett. 1966)
- *Language Meaning and Maturity*. ed. Hayakawa. (Harper & Brothers. 1953)
- 『認識』 カッシラア, 矢田部訳 (培風館, S. 16)
- 『言語』 カッシラア, 矢田部訳 (培風館, S. 16)
- 『一般意味論』 A・ラボポート, 真田訳 (誠信書房, S. 40)
- 『論理とことば』 B・F・フッペ, J・カミンスキー, 大久保訳 (紀伊国屋書店, 1964)
- 『ロック』 田中他 (清水書院, S. 43)
- 『人間知性論』 ロック, 大槻訳 (中矢公論社, S. 42)
- 『行動と思考における言語』 ハヤカワ, 大久保訳 (岩波, 1956)